

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2023

「にこやかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第8回 12/15 (金) 13:30～15:00 報告

バスティアンとバスティエンヌ ―モーツァルトの田園劇―

講師 菅野 道雄 (本学教授) 於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*

令和5年度第8回公開講座が12月15日(金)に開催されました。

今回の講師である菅野先生は、クラシック音楽を話題にした講座で、毎年アンカーを務めています。昨年はショスタコーヴィチの最後の交響曲が取り上げられましたが、今年度のテーマが「にこやかに生きる」ということなので、念願のモーツァルトの歌劇を取り上げることにになりました。

以前からオペラを公開講座で聞かせたい気持ちはあったそうですが、制定された90分間の制限の中では通常のオペラの一部しか紹介できず、断念せざるを得ませんでした。しかし、モーツァルトの「バスティアンとバスティエンヌ」を思い出したら歌劇の可能性がよみがえりました。「バスティアンとバスティエンヌ」はモーツァルトが12歳の時に作曲した作品であり、必ずしもオペラというジャンルを代表する作品ではないものの、40分弱で完結しますので、ムード的にも時間的にも公開講座の題材にぴったりと先生は思って選んだそうです。

モーツァルトの時代では、オペラはイタリア語で書くことが慣習でしたので、ドイツ語で書く歌劇はジंकシュピールという別物になります。モーツァルトの作品の中に、「フィガロの結婚」や「ドン・ジョヴァンニ」という名作オペラも、「後宮よりの逃走」や「魔笛」などジंकシュピールを代表する作品もあります。「バスティアンとバスティエンヌ」はジंकシュピールとして、1768年に作られたが、1回だけの(未確認)のプライベートの上演以降、1890年まで基本的に未公開でした。

「バスティアンとバスティエンヌ」はジャン＝ジャック・ルソーのオペラ「村の占い師」のパロディとして作曲されました。その話では、若い2人の恋人は嫉妬の演技から生まれた勘違いで悩みますが、魔法使いのコラ(タイトルの「占い師」)が仲直りさせてくれます。ルソーのオペラはフランス語の物語としてもされ、またドイツ語のリブレットにもなっていましたので、モーツァルトは豊富な材料を活用できました。当時、田園劇は流行していたし、ストーリーは単純なので、若いモーツァルトにぴったりな題材だったが、あのいたずら好きな性格はすでに見られていたせいか、パロディとして作られました。

今回の公開講座で観た映像は、2006年に開催されたモーツァルト生誕250周年のザルツブルク音楽祭で収録されたものでした。100年以上の歴史を誇るザルツブルク・マリオンネット劇場でのパフォーマンスでしたので、通常の歌劇にない操り人形の登場もありました。音楽祭ではたくさんの舞台作品を上演するのに必要な劇場が足りなく、やむを得ず人形劇として演出されたかもしれないが、たぶんそうではないと先生は思っていました。人形劇として演出するのなら、この作品のために専用の人形を作成する必要があることから、人形のための劇場の使用は単なる「間に合わせ」だったと考えにくいです。

さらに、この映像の興味深い特徴として、「劇場支配人」という劇中歌劇も演じられました。「劇場支配人」はモーツァルトが1786年、ウィーンで作曲したもので、劇場の支配人が新しい劇団を立ち上げるときの奮闘の物語です。映像にある公演では、支配人が「バスティアンとバスティエンヌ」のオーディションを行ったところ、バスティアン役をすぐに決めましたがバスティエンヌ役のいい候補が複数いて決められません。そのため、今回の「バスティアンとバスティエンヌ」のプロダクションでは、バスティエンヌ役が途中で（若干重なりながら）交代するという斬新な演出となっています。モーツァルトがまさにやりそうなカラクリです。

「皆さんはどちらのバスティエンヌが好きですか？」という先生の問いかけで講座が終わりを迎えました。

【講座の様子】

